【213】

氏　名(本　籍)	小川（おがわ）　功（いさお）（茨城県）
学位の種類	博　士（医　学）
学位記番号	博　乙　第　787　号
学位授与年月日	平成 4 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
審査研究科	医　学　研　究　科
学位論文題目	胸部X線無所見気管支扁平上皮癌の研究 ——特に気管支鏡的肉眼形態，組織学的進展度と治療の適応についての考察—— （Dissertation形式）

主　査	筑波大学教授	医学博士	長谷川　鎮　雄
副　査	筑波大学教授	医学博士	稲　田　哲　雄
副　査	筑波大学教授	医学博士	小　形　岳三郎
副　査	筑波大学教授	医学博士	三　輪　正　直
副　査	筑波大学教授	医学博士	村　上　正　孝

論　文　の　要　旨

〈目　的〉

早期肺癌が多数を占める胸部X線無所見気管支扁平上皮癌の切除成績は，必ずしも良好ではない。本研究は，この腫瘍の臨床的および組織学的特徴を解析し，その治療における問題点に検討を加え，同時に内視鏡的肉眼所見を分類し，これに対する組織学的局所進展様式の裏付けをもとに，切除療法と内視鏡的レーザー治療法の適応基準を確立することを目的とした。

〈対象と方法〉

喀痰細胞診集検により発見され切除治療を施行した胸部X線無所見気管支扁平上皮癌30例を対象に，それらの術後成績，及び切除断端腫瘍遺残例，多発癌例について検討を加えた。また，これらの32病巣を肉眼的所見より隆起限局型，平坦進展型，混合型に分類し，その気管支粘膜面における腫瘍の最大の拡がり，気管支壁内深達度を組織学的に検討した。このさい深達度が筋外層にまで留まるものを内視鏡的レーザー治療の適応があるとみなした。

〈結果及び考察〉

①対象の平均年齢は66.6歳，全例が男性の高度喫煙者で，30例中22例に肺機能障害をみとめた。切除断端腫瘍遺残例は 5 位とも上皮内限局病巣のため病巣辺縁部の境界が肉眼的に不明瞭であった。30例中 5 例が多発癌症例であった。術後死亡例は 4 例で，本疾患の切除成績不良は，高齢ならびに高度喫煙低肺機能例，および肺多発癌症例が多いことによると考えられた。

②高齢および低肺機能症例において外科的切除が第一選択とはならない症例の存在が明らかとなったため，これらにたいする内視鏡的レーザー治療の適応基準の決定について検討した。隆起限局型7病巣の肉眼的所見と組織学的浸潤範囲，深達度の解析により，直径5㎜以下ではレーザー治療の適応があり，10㎜を越えなければ肺区域切除などの縮小手術が可能と考えられた。平坦進展型は20病巣についての同様の検討から，表層進展径の拡大とともに気管支腺導管上皮に沿った進展傾向がみられ，直径20㎜までは軟骨周囲への浸潤を認めなかったが，病巣周辺部の肉眼的把握が困難なことから，直径10㎜以下が肉視鏡的レーザー治療の適応と判断された。混合型5病巣は，分析の結果，より進展した肉眼的形態と考えられ，通常の切除治療が適切と考えられた。

以上により，胸部X線無所見気管支扁平上皮癌は肉眼的・組織学的に大きく2型に分類することができ，それぞれの内視鏡的肉眼所見から腫瘍の拡がりを推定し，これを基準として治療法の選択決定が可能なことが明らかとなった。

審　査　の　要　旨

本研究はX線無所見肺癌症例の手術成績が，必ずしも良好でない点に注目し，その扁平上皮癌30例，32病巣について肉眼的手術所見より隆起限局型，平坦進展型，混合型の3型に分類して，その組織学的所見，および年齢，肺機能検査成績等の臨床データとを総合的に検討を加えたものである。その結果，外科的治療のみが第1選択ではなく，内視鏡的レーザー治療によって好成果を期待しうる症例が存在することを明らかにした。さらに，これらの治療法の選択決定について，内視鏡的肉眼所見を中心に臨床の実際に即した簡明な基準案を提案しており，そのきわめてpracticalな着想は，この分野の今後の臨床診断治療の進歩に資する可能性が高い。学位論文として十分評価に値するものと判断される。

よって，著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。